2021年8月29日　礼拝説教

「遠くて近い信仰者」⑦ギデオン　　**士師記 7:1～7**

１．日本のクリスチャン人口

きょうは、聖書に入るまえに、日本の宗教人口についての統計を紹介しておきたいと思います。文科省文化庁による昨年 2020 年の統計です。日本では宗教は、「神道」、「仏教」、「キリスト教」と、「諸宗教」の四つに分類しています。それぞれの信徒数は、神道が約 8,900 万人、仏教が約 8,500 万人で、ほぼ同じです。「諸宗教」が約 800 万人、キリスト教が 191 万人です。合計すると、約 18,400 万人になります。ところが、昨年の日本の人口は約 12,600 万人でしたから、信徒数のほうが人口よりも 5 千 8 百万人も多いのです。これはひとりがふたつ以上の宗教の信徒に数えられているからです。日本では無宗教の人まで、知らない間にどこかの神社の氏子や寺の檀家になっていて、信徒として数えられています。ですから、どの宗教に何人という統計は、日本の場合あまり正確ではないと思います。

「キリスト教」に数えられている人たちが 191 万人となっていますが、これも、実数はその半分でしょう。多くの調査では、クリスチャン人口は 100 万人には満たず、人口の１％以下だと言われています。日本のクリスチャンは、ローマ・カトリック教会が全体の 46%。日本キリスト教団が 13%、聖公会が５％、バプテストが 4%などの順です。ちなみに同盟基督教団はクリスチャン人口の 1%ほどです。日本全体の 1%がクリスチャンで、その中の 1%が同盟基督教団なら 1 万人いて一人が同盟基督教団の人ということになります。豊中市は約 40 万人ですから教会に豊中市の人が 40 人ぐらいいることになるでしょうか。妥当な数だと思います。それにしても少数ですね。しかし日本のクリスチャンはたとえ数が少なくても、社会の中でとても良い働きをし、よく教会を支えています。歴史的には孤児たちを守り、女性を保護し、ホームレスの人々などを支援し、病院を建ててきました。日本で生協、生活協同組合を始めたのも、会社の労働組合を始めたのもクリスチャンの賀川豊彦でした。日本でホスピスを始めたのはクリスチャンでした。全国にはクリスチャンの学校がいたるところにあり、75 万人の学生がなんらかの形で聖書に触れ、クリスチャンと出会っているのです。なのに、なぜ日本ではクリスチャンが少ないのか。多くの人がさまざまな意見を述べていますが、まだ決定的な答えはありません。わたしたちは、そうした議論に加わるよりも、「ひとりも滅びることなく、すべての人が救われる」ことを望んでおられる神（第一テモテ 2:4、第二ペテロ 3:9）の思いを自分の思いとしたいと思います。パウロが「私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。」ローマ 10:1 と言ったように、人々の救いのために、聖書が教えるたましいの救いを得る人が多くなるように、熱心に祈りたいと思います。

２．数と質

わたしたちはクリスチャンが増えることを願っていますが、だからと言って数がすべてだとは思っていません。質も大事です。しかし、質というものは、ある程度の数がある中で切磋琢磨され、向上していくものだと思います。教会に集う人が少ないうえに、高齢化し、新しい人や若い人が入ってこなくなると、教会の成長は止まってしまいます。教会員同士は、親密になり、居心地のよい場所を作ることができるかもしれませんが、そこでは、新しいものを学び、それを取り入れ、互いに成長していくことがなくなってしまうのです。そう言ったことは以前から言われていましたがコロナ禍にあって切実な問題として考える必要が出てきています。来月に「蛍池聖書教会の明日を考える会」といった懇談会を持つ予定です。教会に集まることの出来る人はコロナ禍にあって少ないですからぜひ ZOOM で参加していただきたいと思います。ZOOM や YouTube 配信などネットを使っての教会活動は今までは緊急の手段であり、一時的なものと考えられてきましたがこれからはこれも電話や手紙と同じように普通のコミュニケーション手

段となりつつあります。案ずるよりも産むが易し、ぜひチャレンジしていただきたいと思います。

さて教会はエルサレムに集まった百二十人（使徒 1:15）からはじまりました。ペンテコステの日、教会は百二十人から一気に三千人になりました（使徒 2:42)。その三千人に「男だけで五千人」(使徒 4:4) が加わっています。聖書は、「主を信じて仲間に加わる者が、男女とも、ますます多くなってきた」(使徒 5:14)、「弟子の数がふえてくるにつれて」(使徒 6:1)「弟子の数が、非常にふえていき」(使徒 6:7)、「こうして教会は、…次第に信徒の数を増して行った」(使徒 9:31) と、クリスチャンの増加をしるしています。じつは、使徒 6 章や 9 章で使われている「数が増える」という言葉は、＜原語で　πληθύνω (plēthunō) と言い＞「増える」「数が増す」「何倍にもなる」という意味があり、英語では「掛ける」と訳されます。つまり教会は、5 + 5 = 10 という「足し算」ではなく、5 x 5 = 25 という「掛け算」のようにして増えていったというのです。徐々にではなく一気にです。初代教会においてクリスチャンの数も、教会の数も「倍」から「倍」へと「掛け算」のように増えていったのは、たんなる社会現象ではありませんでした。それは、使徒 9:31 に、「主をおそれかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、次第に信徒の数を増して行った」とあるように、神への敬虔さが教会の中に育てられ、ひとりひとりが聖霊の生命に生きていたからです。現代も、「主をおそれ聖霊に励まされる」のでなければ、クリスチャンが増え、教会が増えることはないでしょう。わたしたちも、多くの人に教会に来てもらいたいと願っています。ただ教会に来るだけでなく、来て、信仰を持ち、バプテスマを受けてクリスチャンになるよう祈っています。そして、バプテスマを受け、クリスチャンとなった者が、もうひとりのクリスチャンを生み出すことのできるキリストの弟子へと成長することを目指して励んでゆきたく願わされます。

３．ギデオンの三百人

さて今朝のギデオンの物語は、神の導きに従うならばどのようなことが起きるのかをわたしたちに教えてくれます。ギデオンという名前の意味は「伐採者」です。木を伐採して土地を開拓するわけですが名前からすると勇猛果敢な人に見えます。御使いもギデオンのことを「勇士よ。」士師記 6:12 と呼んでいます。しかし神様から「ミデヤン人と戦いイスラエルを救い出せ」ということばを聞いた時、ギデオンは非常に弱気で「私の属するグループは弱くて、しかも私はグループの中で一番若いのです」と逃げ口上ばかり語っていたのです。さらにギデオンは神様が話しておられることが確かであるしるしを下さいとまで言っています。ですからギデオンは勇敢な人であったというより神様に忠実な普通の人であったということです。そんなギデオンは、ミデヤンと戦うために、最初三万二千人の人々を得ました。それを見てギデオンは「ミデヤン人と戦うためにこれだけの兵士を神様は揃えてくださったのだ」と理解したことでしょう。ところが、神は、ギデオンに「あなたと共におる民はあまりに多い」と言われました。戦争には、兵士が多いほうが有利なのは分かりきったことなのに、なぜ、神はそう言われたのでしょうか。圧倒的な数でミデヤンに勝ったなら、人々は「わたしは自身の手で自分を救ったのだ」と言って、自分を誇り、神への信頼を忘れるだろうことを神はご存知だったからです。人々が神に頼るよりも、数と力に頼ることを神はご存知なのです。臆病な者、不信仰な者を神の働きのために励まし奮い立たせるのは難しいことです。しかしそれと同じぐらい、人が事を起こし、それなりの成果をあげた時に、「これは自分の力ではなく神様の憐れみと恵みによるのです」と心の底から告白することも難しいことなのです。ギデオンはその訓練を神から受けていたのです。

それで、ギデオンは、「だれでも恐れおののく者は帰れ」と言って二万二千人の人を帰らせました。残

りは一万です。ところが神は言われました。「民はまだ多い。」そして、神は、ギデオンと共にミデヤンと戦う者が誰であるのかを示すと言われました。けれども、神はどのようにして、そのことを示されたのでしょうか。それは、人々が水を飲む、飲み方によってでした。ギデオンは、一万人を連れて水ぎわに降りていき、兵士たちに水を飲むように言いました。そのとき、大勢の人たちは、水際に這いつくばって、口を水につけて、まるで動物のようにして水を飲みました。しかし、それは兵士としてまったくふさわしくないものでした。這いつくばって水を飲んでいたのでは、敵に襲われたときひとたまりもありません。そんなところに矢を打ち込まれたら、身をかわして防ぐこともできません。

しかし、兵士として訓練された人たちは、用心深く手で水をすくって飲みました。おそらく、片手で水をすくい、もう片手は剣や槍に手をかけていただろうと思います。神は、這いつくばって水を飲んだ者を家に帰らせるようギデオンに命じました。ギデオンがそのようにして人々を家に帰らせ、残った人を数えると、わずか三百人しかいません。最初の三万二千人の 1 パーセントぐらいになってしまったのです。こんな数でミデヤンを打ち負かすことができるでしょうか。人間的には不可能です。しかし、神が共におられるなら、どんなことでも可能になります。ギデオンは「数」ではなく「神」に信頼して、ミデヤンと戦い、そして勝利しました。詩篇 33:16 に「王は軍勢の多いことによっては救われない。勇者は力の強いことによっては救い出されない」とある通りです。ギデオンは、救いは神にあるということを信じ、たった三百人で、敵と戦ったのです。神が求めておられるのは目立つ賜物や才能を持った人ではなく、平凡ながらも信仰においては堅く主に従う人なのです。

日本のクリスチャンは人口の 1 パーセント以下かもしれません。しかし、神が共に戦ってくださるなら、勝利があり、1 パーセントから 5 パーセントへ、5 パーセントから 10 パーセントへと増えていくことは可能なのです。神が求められるのは、神が共に戦ってくださることを信じる信仰、「わたしもギデオンの三百人になる」という決意、また、主の戦いのために自らを整える訓練です。この信仰の訓練を進んで受けたいと願わされます。そして、「主も、毎日救われる人々を仲間に加えて下さった」（使徒 2:47）との言葉が、今の時代に、ここでも成就していくのを、見たいと思います。何も出来なくとも、主に従う信仰を神は見ていてくださることを信じて進みたいと思います。